

『1984』（ジョージ・オーウェル）のメモ

takaidos

読書メモ

本-1984 ジョージ・オーウェル 2015-04-16~04-27

1949年発行。

ディストピア小説。反ユートピア。

アメリカなどでは、一般的には反共主義のバイブルとしても扱われた。

党に都合の悪い人間は罪をでっち上げて粛清し存在しなかった事にする。

逆平民でも我が身を犠牲に手柄を挙げたと偽の宣伝をする。

個人の言動は何かしらの方法で常に見張られ、物資は配給制だが、党中枢メンバーだけは上質の物資を確保できる。

戦時中の日本でも同様。

オーウェルの生きた1903~1949年結核で死ぬまで、彼はスペイン内戦、第一次・第二次世界大戦、イギリスは戦時中のチャーチル全体主義から労働党支配を経験していた。

全体主義や社会主義に失望していた。

<登場人物>

ウィンストン・スミス:真理相職員。39歳。ヴィクトリー・マンション在住。

オヴライエン:党中枢委員。

エマニュエル・ゴールドスタイン:党指導者だったが変節して反革命運動に加わった。

ジュリア:黒髪の女。26歳。虚構局のポルノ課でプロール相手のポルノ本印刷の仕事をしている。スパイ団→青年団→反セックス青年同盟。個人で自由に生きている。

薄茶色の髪の女

ミセス・パーソンズ:30歳くらい。隣人トム・パーソンズの妻。9歳の長男と7歳の長女の母。

トム・パーソンズ:真理相職員。35歳でやっと青年団を卒業出来た愚鈍な太った男。

ティロットソン:真理相職員。

ウィザーズ:BBが存在を抹消するよう通達を出した人物。

オーグルヴィ:平党员だったが名誉の戦死をしたとBBがデッチあげた架空の青年。

サイム:

アンプルフォース:詩人。

キャサリン:ウィンストンと15ヶ月過ごした妻。今は別居。党の言う事を何でも信じる。

ジョーンズ:反体制派で処刑された。

エアロンソン:反体制派で処刑された。

ラザフォード:反体制派で処刑された。

栗の木カフェ:反体制派が集まる店。

ミスター・チャリントン:古道具屋ウィークスの老主人。

バムステッド・J:収容所に餓死寸前で入って来た男。

<あらすじ>

世界はオセアニア、ユーラシア、イースタシアの超大国に三分されていた。

オセアニアはビッグブラザーを長とする党全体主義支配を受けていて、人々は双方向のテレスクリーンや盗聴器などによって常時監視されていた。

党中枢は全人口の2%(600万人)、党外郭は13%、最下層民プロールは85%。

至る所に貼られた「ビッグブラザーは見ています」というポスターと党のスローガン。

「戦争は平和なり

自由は隷従なり

無知は力なり」

党外郭を構成する、多少とも知性のある人間は、党が「2+2=5」と言えば、「5」と答えなければその存在は消されてしまう。

最下層民プロールは動物といっしょなので自由。

支配体制は、愛ではなく憎悪だった。

子供たちは学校でスパイ・密告の教育を受けて親たちが反体制的なことを言えば通報し親が消されてしまう。

家族は破壊され、党への絶対忠誠を強いられていた。

党外郭メンバーは、子供時代にスパイ団に入れられ、成長するに従い青年団、反セックス青年同盟、最終的に党の省へと勤務する。

ロンドン、オセアニアで3番目に人工の多い第一エアストリップは被爆のあとが残っていた。

党の本部は白いピラミッド型建物でテラスが何層にも重なっていた。

そこには真理省(報道、娯楽、教育、芸術)、平和省(戦争)、愛情省(法と秩序の維持)、潤沢省(経済問題)があった。

党による国民の監視体制は厳しく、ヘリやテレスクリーンで行われていた。

ウィンストンは『自由市場での取引』という本を手に入れたり、日記を書き始めたりした。

見つければ最高で死刑。

映画館では逃亡する反政府者？を殺す映像に党員たちが拍手をしていた。

真理省で働いているとオ布莱エンと黒髪の女が入って来て、党の裏切者ゴールドスタインを罵る「二分間憎悪」の時間がやって来る。

マンション自室にいとパターンソン夫人が来てキッチンの詰まりを直してくれというので、行くと子供達がウィンストンを反逆者とした仮想の遊び興じる。

部屋は荒れ放題だった。

子供達は学校教育を受けて親たちを監視するスパイでもあるのだった。

真理省ではウィザーズが存在を消す文書訂正の仕事や、オーグルヴィという架空の青年を英雄のように称賛する文書作りの仕事。

妻キャサリンの思い出。

キャサリンは党の言う事を全て信じる女性だったが、子供が生まれないと、ある日突然消えた。

ウィンストンはBBが支配する以前の時代の話を知りたくて、貧民街の居酒屋にいた老人から話を聞く。
そして以前禁書買った古道具屋に行く。
すると黒髪の女と出逢う。

2回目に遭った時、その女ジュリアは腕に包帯をしていて、ウィンストンに手紙を渡す。
その後、ウィンストンはジュリアと食堂や表で逢い、ついに郊外の田舎で落ち合う。

ウィンストンとジュリアはその後も逢瀬を重ねる。

古道具屋の貸し部屋では、ジュリアが党中枢だけが持っている本物のコーヒーやサッカリンでない砂糖を持ち込み、化粧もしてみせるのだった。

サイムが消えた。

ウィンストンとジュリアはオ布莱エンの家に行き、オ布莱エンを反体制派のメンバーと推察し、自分たち身を彼に委ね反体制派として活動すると誓う。

オ布莱エンはウィンストンにどんな非情な破壊活動もするか？と問う。

後日打合せ通り、エマニュエル・ゴールドスタインの本『寡頭制集産主義の理論と実践』を借り、古道具屋の二階で読む。

『第1章 無知は力なり
第2章 自由は隷従なり
第3章 戦争は平和なり』
犯罪中止、二重思考、黒白。

ウィンストンとジュリアが古道具屋の二階で幸せな時間を過ごしていたところに、ついに思考警察が踏み込んできて二人は逮捕されてしまう。

店の主人ミスター・チャリントンは思考警察だったのだ。

監房に入れられたウィンストンの前に現れたのは、オ布莱エンだった。

彼はウィンストンを拷問し再教育する。

党が $2+2=5$ といえ、5であると。

過酷な拷問末、ウィンストンは骨と皮ばかりなる。

最後に嫌いなネズミに顔を齧られる直前で、「ジュリアにやってくれ！」と叫び、解放される。

解放されたウィンストンはビッグブラザーのポスターに感謝する。

<ニュースピークの諸原理>

ニュースピークは人々に余計なことを考えさせないように改訂され続けている削減された語彙。
たとえばfreeにある「自由な」という意味はもう政治的に自由な、という意味では使われない。
goodの反対はbadだが、nongoodとしてしまう。

過去の文学もこれが適用されることによって、作者が意図したことは伝わらなくなる。

<解説>

トマス・ピンチョン

～解説が難しい。

第二次世界大戦のときのチャーチル・イギリスは全体主義だった。

1945年7月～1951年労働党が与党になる。

しかしオーウェルは官僚主義、金権主義に走る社会主義に失望していた。

インターネットの時代において、大国はより世界のコントロールがしやすくなった。

全体主義はこれから本格的に行使されるのかもしれない。

<訳者あとがき>

高橋和久

<メモ>

世界を3分する国家地域。

オセアニア

ユーラシア

イースタシア

イングソック:正統派。ニュースピークという正統派言語を使う。

ニュースピーク:正統派言語。無駄な言葉を徹底して省きつつある。

真理省

「ビッグ・ブラザーは見ている」

党の3つのスローガン

「戦争は平和なり

自由は隷従なり

無知は力なり」

思考警察

記録局

虚構局

記憶穴:ダストシュート。不要な書類を焼却施設へ送る。

宝くじ:プロールの楽しみ。架空。

二分間憎悪の時間:洗脳のひとつ。

二重思考:矛盾した発表でも党の言いなりに信じること。

表情犯罪:顔に反意・疑いを示しただけでも犯罪となる。

プーール:最下層民。オセアニアの85%を占める。アボリジニのような人種?食堂の給仕など。香水を使ってもいい?ジンを呑めない。

アートセム:人工授精。

反セックス青年同盟。

ブラザー同盟:反体制派。